愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－　第38号　2013.3　23-39

# 山田耕筰の歌曲研究

A Study on Kosaku Yamada's Songs

浅　田　まり子
ASADA,Mariko

## 1．はじめに

愛知県蟹江市立蟹江小学校を訪れた折、その小学校の校歌がサトーハチロー作詞、山田耕筰作曲であることを知り、筆者自身がこの出会いに感動を覚えた。校歌の多くはその土地の風景や校訓が歌われていることが多いが、その校歌は鳥たちが生徒達をみている様子などが歌われているとても愛くるしい歌詞であった。

蟹江小学校は明治５年精勤学校として創設され、明治25年蟹江尋常小学校となり、昭和22年蟹江小学校となり昭和28年に校歌が制定された。回顧録によれば、校歌の作曲を依頼された蟹江にゆかりがあるという山田耕筰はつぎのように語っている。

「たしかに私のおばあさんは蟹江の人で、私の父は蟹江で生まれています。いわば、蟹江は私のふるさとでもありますから、その中学校や小学校の校歌を頼まれれば、喜んでお引き受けいたしましょう」と気持ちの良い返事であったそうだ。[1] また、今では町内の他の小学校４校でも同じ歌が校歌として歌われ、小学校名が変わるだけであることを聞いた。蟹江小学校には山田耕筰の直筆の楽譜や手紙、自動車で来校している写真を拝見することもできた。

日本歌曲の山田耕筰研究を以前から考えていたので、身近に感じられることができたこの機会に、山田耕筰という日本を代表する作曲家について、耕筰自身が生きた時代の流れや生活環境によって湧きでた旋律と詩人による歌詞から完成した日本歌曲を辿り、最も人々に親しまれている歌曲そして芸術歌曲へ発展の考察をする。

## 2．年譜（１８８６年～１９６５年）

耕筰の年譜[2] によれば、明治19年（1886年）６月９日東京本郷に二男として生まれた。父の愛情をほとんど知らないまま幼少時代を過ごし、６歳の時に次姉夫婦に引取られ、医師であった父は病気であと３年と自分の命を決めてしまうとキリストの伝道師になり、千葉に居を移し

耕筰を引き取り、耕筰が10歳の時に他界。そして伯父の養子となる。

その後、耕筰は13歳で肋膜炎となり、6か月生死の間をさまよい、15歳の時、長姉ガントレット・恒子夫妻にひきとられ、岡山に移る。ここで、義兄E・ガントレットに西洋音楽の手ほどきを受ける。18歳で母が他界。関西学院本科を終え、東京音楽学校（現：東京芸術大学）予科に入学し、翌年本科声楽部に進級。

22歳で本科卒業。23歳自作のオラトリオ「誓いの星」を小山内薫演出で上演。東京音楽学校分教場補助（唱歌担当）を勤める。24歳　岩崎小弥太の後援でドイツ・ベルリン高等音楽学校に入学し、作曲を学ぶ。26歳　日本人で初の交響曲「かちどきと平和」を卒業制作、ほかに管弦楽曲「序曲」「秋の宴」オペラ「墜ちたる天女」（坪内逍遥原作）などがある。27歳　留学最後の年、ピアノ5重奏曲「婚姻の響き」、交響詩「暗い扉」「曼荼羅の華」を作曲。28歳　三木露風主宰「未来社」同人となる。12月日本最初の交響楽演奏会を開く。29歳　東京フィルハーモニー会管弦楽部第1階公開試演奏会開催。秋に永井郁子と結婚。翌年離婚して村尾菊尾と再婚。小山内薫と「新劇場」を結成。

32歳　前年末、渡米。カーネギーホールで自作の管弦楽曲による第1回演奏会開催。翌年第2回を開催。34歳　三木露風主宰「牧神会」同人に。日本楽劇協会を創立。36歳　東京市民合唱団を組織。日本語による日本の歌を生み出そうと北原白秋と雑誌「詩と音楽」を創刊。39歳　雑誌「女性」に自営館時代のおもいでにつながる、「からたちの花」を発表。日本交響楽協会を創立。第1回演奏会を開催。

41歳　日本トーキー映画の音楽を担当。44歳　山田楽団生活25年祝賀演奏会開催される。12月耕作を耕筰と改名。45歳　ピギヤール座の招きで渡仏。渡仏中にオペラ「あやめ」を完成。47歳　ソヴィエト政府より招請を受け、菊尾と共に訪ソ。

50歳　レジオン・ドヌール勲章を授与。大日本音楽協会副会長を就任。54歳　オペラ「夜明け」「黒船」を東京宝塚劇場で初演。翌年「夜明け」公演に対して、朝日文化賞受賞。

62歳2月脳溢血で倒れる。64歳　第1回放送文化賞受賞。65歳　「山田耕筰賞」を設立。第1回を團伊玖磨作曲「夕鶴」に贈る。2月自伝「若き日の狂詩曲」。67歳11月蟹江小学校に山田耕筰・辻輝子、三橋あや子が来校。68歳　「黒船」「夜明け」上演。映画「ここに泉あり」に出演。

70歳　文化勲章を受章。妻菊尾と離婚。辻輝子を入籍。戸籍上も耕筰と改名。72歳　大阪毎日新聞社委嘱「寿式3番叟の印象による組曲風祝典曲」をしき、初演。79歳　12月29日心筋梗塞のため死去。

## 3．両親

### (1) 父

耕筰の父は医者であったが、動脈瘤と胃瘤を患って自分の寿命をあと3年と決めてしまうとキリスト教の伝道事業に携り、傍ら千葉県幕張の宿で病を養っていた。「父の愛情というものをほとんど知らないままに私は過ごした。」とあるが、その最後の別れ方は次のようである。

ある朝のこと、私はいつもするように、蕗の葉を入れた痰吐きをもって父の病床に近づいた。父は何を思ったか、じいッと私の顔を見つめていたが、「耕作！」と改まって私に呼びかけた。ふだん「耕坊」とよびならされていた私には、それは異常な響きをもつ呼び声であった。

「何です！」ややおくれ気味に問い返した私の頬は激しい痛みを感じた。父の大きな掌が、横ざまに飛んできたのである。私は「わァッ」と声を上げて、母のところに逃げて行った。が、父はそのまま頭から、すっぽり布団をかぶって終った。今にして考えてみると、既に死期の来るのを知っていた父が遺して行く私への愛情を、そうした思いがけない形式で表わしたものなのであろう。[3)]

このような父からの愛情表現が山田耕筰にはたびたびあり、現在でいう児童虐待に相当するかもしれないが、この時代の父親は山田耕筰だけでなくかなり厳しい時代であったと考える。この時代は世の中全体に荒々しく、軍楽隊の時代であったので、その環境にあって今のような自由で楽しく・・というような時は考えられなかったに違いないし、まして憩を感じられるような音楽はおそらく少なかっただろう。また、父と10歳で死別したことはバッハと境遇が同じである。バッハは実兄に育てられ、音楽を学んでいる。

### (2) 母

耕筰は母について次のように語っている。

「母は板倉の藩士高橋家に生まれ、美貌の持ち主でありお姫様のお相手をしていたが、お姫様と同名だったので、きさを久と変え、そのうち同藩の加藤家に嫁した。その後、夫は陣没し、若後家となって里に帰ったが福島から三河へ移された。父は尾州碧海郡の医者の長男として生まれた。祭につきものの喧嘩で追われていた男を母が助けた時の武勇伝？を聞いたのか父はある日、単身、高橋家に訪れて母に婚姻の申し入れをした。[4)]

伯父から耳にした話であるが、父の血管にはこの荒武者の血が流れているような気がしてならないようだ。荒武者は五十で世を捨てた。父も五十で世を去った。（中略）母を愛さぬ父ではなかった。人一倍子を慈しむ父でもあった。しかもその行動は、ただ自我の、非道に近き、発展のみに終始した。妻は泣き、子は惑うた。（中略）母はわたしをふくめて五人の子があった。その五人のこの上に「夫」という悪童がいたのである。愛は勝ったのである。いや愛は一切浄化したのである。そう私は言い換えよう。母の大きな愛のために。[5)]

13歳の6月肋膜炎から危うく死をのがれた私は母と鎌倉に移り住み、足掛け三年にわたる私

の静養生活が始まる。父の遺言を守るために母は健康に障りのない範囲で私は、毎日労働した。[6] 深夜など、ふと目があくと、針仕事をしている母の姿が私の眼に沁みた。母はそうした賃仕事で家計を支えていたのだった。[7]

18歳の夏だったかと覚えてる。大阪に空前の大博覧会が開かれた。母はそれを見物方々岡山の姉を訪ねたのであった。が、突然病を得て、そのまま起つ事が出来なくなって終わった。母の病は子宮癌であった。」[8]

## 4．作品とその背景

### （1）日本芸術歌曲としての出発

耕作は音楽環境にはとても恵まれていたと考える。自ら作曲についてこう語っている。

「キリスト教的家庭、讃美歌、オルガン、それらも、私を音楽に結びつけてくれた。それに横須賀の軍楽隊。それもまた強い刺激になっていることはたしかだ。が、何といっても、三番館の言いようもない美しい演奏。あれだ！あれが私を作曲家にしたのだ。

いや、しかし、あの柔らかくて、怖ろしい、身が竦むような夕闇に尾を引く、「○○丸よおッい！」というあのふしぎな声（隅田の下流で陸の用事を了えて帰ってきた船頭が親船を呼ぶ声）が、むしろ私を、作曲家への道へ導き誘い込んだのではなかろうか・・・。」[9]

滝廉太郎も父が外国人と交流があり、家では姉たちが琴の他にヴァイオリンやアコーディオンを習っていたので、彼の家庭環境が音楽をするのに適していたようだ。

西洋の音階によって書かれた最初の歌曲は滝廉太郎（1879～1903）の「荒城の月」であり、「花」は初めて日本の詩による歌曲がその主体的なあり方を確立した年であったようだ。「荒城の月」は旋律だけ書かれ、現在演奏されているピアノ伴奏は山田耕筰の手になるものであるが、これを日本歌曲の出発として考えることが、日本歌曲史の定説となってきた。日本の芸術歌曲としての分野を明確に認識させたのは山田耕筰と信時潔である。

山田耕筰はベルリン留学中に作曲した三木露風の詩集「廃園」からの「嘆き」は「日本最初のリードとして記録されるだろう」と耕筰自身が記しているように、日本のリート創造への激しい情熱がこの言葉の中にうかがわれる。耕筰の特長のひとつとして挙げられるのはヴァーグナーやR・シュトラウスに代表されるドイツ後期ロマン派の影響の濃いことである。彼は後期ロマン派の人たちが好んで用いた変化和音や掛留音を使いながら、日本的な抒情の世界を築きあげた。耕筰の豊富な音楽的語彙はまさに絢爛たる彼の才能の開花といえるだろう。彼が北原白秋と共に創刊した「詩と音楽」においても詩と音楽の最も幸福な結びつきの時代がここに現出した。技法的にみると、声楽出身だけにドイツ・リートのあり方への的確な把握が見られ、シューマン、ブラームス、ヴォルフ、R・シュトラウスの歌曲あら多くのものを学び取った跡が見える。[10]

耕筰のポピュラーであり、こだわりのある作品の中に「からたちの花」「この道」がある。北原白秋と耕筰自身の追憶の中からもこの曲を探求してみることにする。

「からたちの花」　　北原白秋

からたちの　花が咲いたよ　　からたちも秋はみのるよ
白い白い　花が咲いた　　まろいまろい金のたまだよ
からたちの　とげはいたいよ　　からたちのそばで泣いたよ
青い青い　針のとげだよ　　みんなみんなやさしかったよ
からたちは　畑の垣根　　からたちの　花が咲いたよ
いつもいつも　とおる道だよ　　白い白い　花が咲いたよ

この「からたちの花」について耕筰はこのように書いている。耕筰は父の没後、自営館という活版工場に入れられ、そこは夜学校のある勤労学校で近所では耶蘇学校で通っていた。（中略）「特に私など育つ盛りだったのですり減らした庭下駄のような薄い寄宿舎の弁当ではとても足りようはずはなかった。たまらなくなると、活版所の周囲の畑から、季節、季節の野菜を手当たり次第にとっては、生のまま齧った。（中略）秋になると私の眼は輝いた。からたちの実が色づくからだ。はじめはすっぱくて咽かえるほどだったが、慣れると仲々よきものだった。殊に生の野菜と一緒に食べると下手なサラダなどより数等いい味だった。」[11]

またこのような記録も残っている。この自営館というのは孤児院の施設らしい。

みんなからいじめられたり、年齢の順にご飯をよそって食べるが、おひつに殆どご飯がなかったこと、月に2度だけお魚がついたが、それはイワシが2匹で、空腹のときは働いていた印刷工場の垣根に植えられていた枳殻の木の側で、泣きながら枳殻の実をたべていた思い出を白秋に話したそうである。その話を白秋は涙を流しながら聞き、白秋の故郷の柳川にも植わっていたからたちとだぶらせてこの詩を書いたという。白秋自身が童謡詩について「はじめの頃には、小さな子供に読ませるものを童謡と考えて作っていたが、別に今更児童の心に立ち返る必要もないのだと思っている。詩を作り、歌を成すと同じ心で同じ態度であってよいのだ」と話している。耕筰も「童謡といえども最高の音を探究して一音一音を大切に作っているのです」と言っている。[12]

セノウ・山田楽譜と出版された時のはしがきには「まだ幼かった私、未明から夜半近くまでも労働を敢てしなければならなかった私。―私は、まだ10歳にも満たなかったそのころを想い起こします。それは本当に健げなまたいじらしい、小さな私でありました。そしてその広い畑の一隅は、からたちで囲まれていました。働きの僅かな閑を盗んで、私はどれほどこのからたちの垣根へと走ったでしょう。あの白い花、青いとげ、黄金の果実―いま、私は白秋の詩のう

ちに、私の幼時を見つめ、その凝視の底から、この一曲を唱いだしたのであります。」[13]

「からたちの花」は大正14年（歌曲）、昭和３年（ヴァイオリン・チェロ曲）、昭和４年(歌曲)と形を変えて作曲されている。それだけ、「からたちの花」には強い想いが込められている。

「この道」は「からたちの花」の妹です。「からたちの花」にもました美しい綾衣を織り與えてください。―畏友白秋氏はこうした言葉を添えて、「この道」の一篇の詩を私に寄せた。

世の誰よりも母に愛され、世の誰よりも母に慈しまれた私は世の誰にもまして母を思う心切である。「この道」を手にした私はいとけなかりし日を想い、あたたかい母の手にひかれて、そぞろあるきした道を偲び、ありし日のあわい追憶に耽らずにはおられなかった。私は亡き母の愛にしたりながら静に「この道」を唱いいでた。どうか母を慕う心をつれびきとして、この小さい歌を唱ってください。(昭和２年11月28日、日本交響楽協会出版部)[14]

「この道」　　北原白秋

この道はいつか来た道　　この道はいつか来た道
ああ　そうだよ　　ああ　そうだよ
あかしやの花が咲いてる　　お母さまと馬車でいったよ

あの丘は　いつか見た丘　　あの雲も　いつか見た雲
ああ　そうだよ　　ああ　そうだよ
ほら　白い時計台だよ　　山査子の枝も垂れてる

これは北原白秋が大正14年８月に樺太旅行後、北海道旅行での紀行詩であり、札幌の思い出を歌った詩が「この道」で大正15年の８月号の雑誌「赤い鳥」に発表している。

**（２）日本芸術歌曲としての発展**

日本の生んだ最大級歌曲作家として耕筰の全貌を浮かび上がらせている純芸術作品は四大歌曲集「風に寄せてうたへる春の歌」「AIYANの歌」「ロシア人形の歌」「雨情民謡集」がある。

耕筰の親しみやすい抒情的な旋律と和声は日本人の生活の中に浸透し、大正末期から昭和初期にかけて、これらの愛唱歌ともいうべき名曲がそのあるべき姿を保ちながら日常性を獲得し得たのは、まさに独自の素晴らしい天才によるものといえよう。

ドイツ・ロマン派の芸術家たちの、その原始動ともいうべき核の一つに《幼き頃への回帰》がある。ことにドイツ・ロマン派の詩人たちは“郷愁”という言葉を好んで用いた。―幼い頃へ帰る道を知っていたなら―と、過ぎ去ったものへの思いを詩に、曲に、彼らは託したのである。

ドイツ・ロマン派の影響を一身に浴びながら、若き日をベルリンで過ごした耕筰が、この

《回帰》を自己の創作の原始動として感化されなかったはずはない。それが日本で明確な実を結んだのは1922年北原白秋との「詩と音楽」であり、文学よりも音楽―主として歌曲面に素晴らしい発展を見せた。[15]

ここで、最も親しまれている歌の一つでもある「赤とんぼ」についての背景を紹介する。どうして同じ言葉なのに漢字と仮名の表記があるのだろうか。赤とんぼについては三つ、夕焼小焼では二つある。これは一体どうしてなのだろうか。モーツアルトは同じメロディーの伴奏は一つとして同じものはない。日本の作曲家の大部分も繰り返し出てきたメロディーの伴奏に工夫をする。語意の豊富な作家なら同じ言葉の重複をさけて同じ意味の違う言葉を使うのは当たり前のことである。ある作家は漢字は過去、仮名は現在、と意識して書いていると聞く。（中略）「三木露風全集一巻」の付録にあった～前略「赤とんぼとまっているよ竿の先」というのは露風が小学校二年の時に作った俳句で、その時にお見せしたら大変ほめられ、それから句を作り、和歌を作り、詩を作るようになり、生涯詩を作り詩文を書いて終わった。～後略（「全集のこと」三木なか）

一番～三番までは姐やの楽しい思い出で、四番は夕焼けに染まった赤とんぼを見て、今は嫁いで便りの途絶えた姐やを懐かしく思い出している。三番と四番の間には思い出や時間的な経過があるので、もし演奏で冗長になると思えば、四番の前で前奏を間奏にするのが良い。[16]

「赤蜻蛉」（あかとんぼ）　　三木露風

1．夕焼小焼の　あかとんぼ
　負われて見たのは　いつの日か
2．山の畑の　桑の実を
　小篭に摘んだは　まぼろしか
3．十五で姐やは　嫁に行き
　お里の便りも　絶えはてた
4．夕やけ小やけの　赤とんぼ
　とまっているよ　竿の先

「赤とんぼ」（大正10年作曲）は「からたちの花」（大正14年作曲）と年代が前後しているが、この曲については一見簡単な形式になっているようで、作詞者の意図は深い。

「真珠島」の75編中の第9番目に載っているが、最初は雑誌「樫の実」に発表された時には、1，2番が異なっていて、その後推敲されて現在の詞の形になった。（中略）この歌詞は露風が母のことを思って書いたのは事実だが「詞の内容はあくまでも子守の姐やに対する淡い恋心に似た思い出を歌っているのです」露風記念館の館長がこのように語っていた。[17]

また、この「赤とんぼ」書かれた5音音階の曲である。この中で歌われる《幼き頃への回帰》は、私たちの持っている絶えざる願望であり、それを十分に充たしてくれるものである。「詩と音楽」に先立ってはじめられた「赤い鳥」運動はこれまでのお仕着せの官製唱歌に対する一

種のプロテストであったわけで、子供の自由な想像力の飛翔を、形式主義のもとに統制しようとした日個性的な作品を、ハッキリと拒否したのである。鈴木三重吉は、それまでの学校唱歌を「貧弱低劣」ときめつけ、その影響下にある作品を「俗悪」と評した。こうした中での耕筰のみずみずしい感性とゆたかな想像力に富んだ歌曲は半世紀過ぎた今も、その新鮮な生命力を失っていなのにおどろかされる。

その他の三木露風の作詞による歌曲は「病める薔薇」、「唄」、「燕」(つばくらめ)、「樹立」があり、「唄」は唱歌“蝶々、蝶々、菜の葉にとまれ”の旋律を使いながら、間奏にもヴァリエートして使っているが、露風の詩の一部を省略している。白秋の詩では民謡風な五音音階による夕暮れの叙情と、恋人を待つ切ない感傷を美しく歌い上げた「鐘が鳴ります」や「蟹味噌」(がねみそ）があり、「蟹味噌」の独創的な手法は「雨情民謡集」のその頂点となる。大木惇夫の詩は「母の声」(遠い故郷と母を想う抒情歌曲でその底にはさわやかな情感が流れている。原詩では「みぞれに寄与する愛の歌」は耕筰夫人であった辻輝子女史（山田茉莉子）に捧げられた作品である。[18]

### （3）蟹江小学校校歌

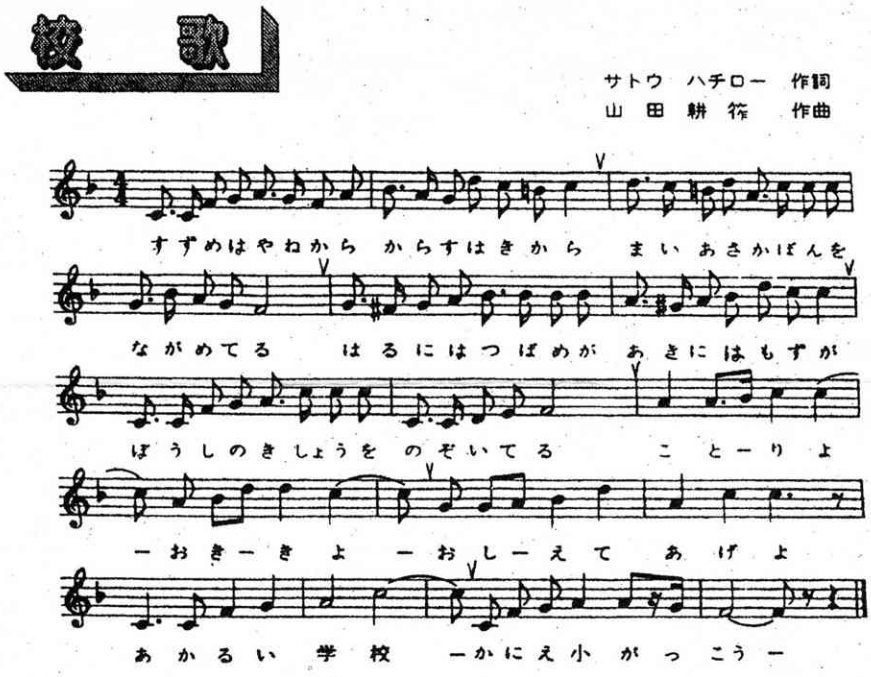
辻輝子（歌手・耕筰夫人）は蟹江小学校を山田耕筰と三橋あや子と共に訪れている。ここで、今年、教育実習訪問指導の際に、見せていただいた蟹江町立蟹江小学校の校歌の貴重な資料を紹介する。

**資料1**は蟹江小学校校歌であり、歌詞は1番から5番まであり、現在蟹江小学校では日常では1番と3番が歌われているそうである。

**資料2**は当時の新聞の切り抜きである。それには次のようなことが書かれている。

「蟹江小学校に1958年5月13日蟹江小学校へ夫人同伴で自動車で訪れ校庭で千余人の児童たちが自作の校歌を歌ってもらった後“皆さん、蟹江町は私の亡き父親の出身地で懐かしの故郷です。この町は私の親友だった詩人北原白秋の出身地（九州）とよく似ています。こうした同じような環境に育つ皆さんのうちから白秋先生のような立派な詩人が生まれることを希望します。そしてわたしの手でよい歌を作曲したいものです。”とつぎの世代をになう児童たちを励まし子供や先生を感激させた。山田耕筰氏は同町に住む前町教育委員山田清三さんと親交があり、28年11月には山田さんから蟹江の各小学校に校歌もないと聞き、「それでは私が作りましょう」と、サトウ・ハチロー氏に作詞を頼んで、自分が作曲当時耕筰氏は亡き父の墓参を兼ね、はるばる来校し、校歌発表会に臨んだことがあり、5年ぶりの12日の夕刻、関西への演奏旅行に出かける途中、最近「いで湯開き」をしたばかりの水郷蟹江温泉が完成したことを山田さんから聞いて、休養のため同温泉で一泊、翌朝忙しい身をさいて、かつて自分の作曲した蟹江小の校歌がどんなに歌われているかを知りたいための小学校を訪れた。耕筰氏は校歌で元気に歌う校歌を聞きながら「とてもじょうずになった」と何度も首を振りながら満足げにうっとりと聞き入っていた。(蟹江小学校服部昌史先生撮影)

資料１　　《蟹江小学校校歌》




校歌

二、ずらりと並んだ
ガラスのおまど
中からきこえる
もれてくる
毎日毎日
かわいい声で
いろはにほへとや
あいうえお
だれもが一度は
おぼえることば
明るい学校
蟹江小学校

三、草の芽　草の葉
すくすく育つ
負けずに
みんなも伸びていく
木枯ふくころ
草の葉かれる
みんなは枯れずに
またのびる
元気な友達
やさしい先生
明るい学校
蟹江小学校

四、一二の三四は
算数　体操
ピアノで覚える
歌の数
外でも勉強
とんぼに　ちょうちょ
たんぽぽ　ひまわり
菊の花
くわしく調べて
互いに話す
明るい学校
蟹江小学校

五、春夏秋冬　風ふく朝も
雨でも雪でも
みぞれでも
あの子も　この子も
こんちは　おはよう
えらいぞ
はげめと鐘が鳴る
雀がみている
からすがのぞく
明るい学校
蟹江小学校

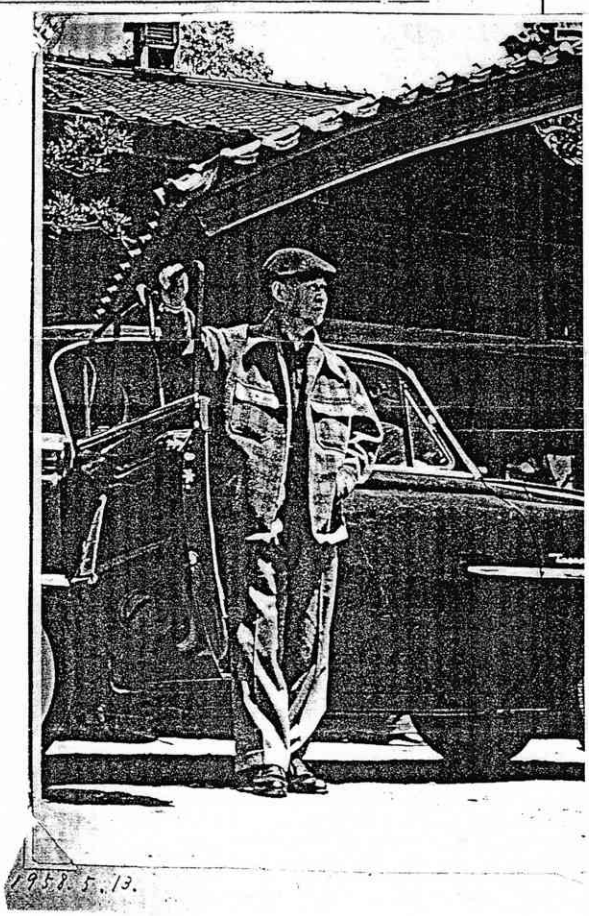
**資料２．** 山田耕筰が昭和33年5月13日蟹江小学校を訪れた時の新聞記事と写真

# 『とても上手になったネ』
## 自作の校歌に満足顔
### 山田耕筰氏 きのう蟹江小へ

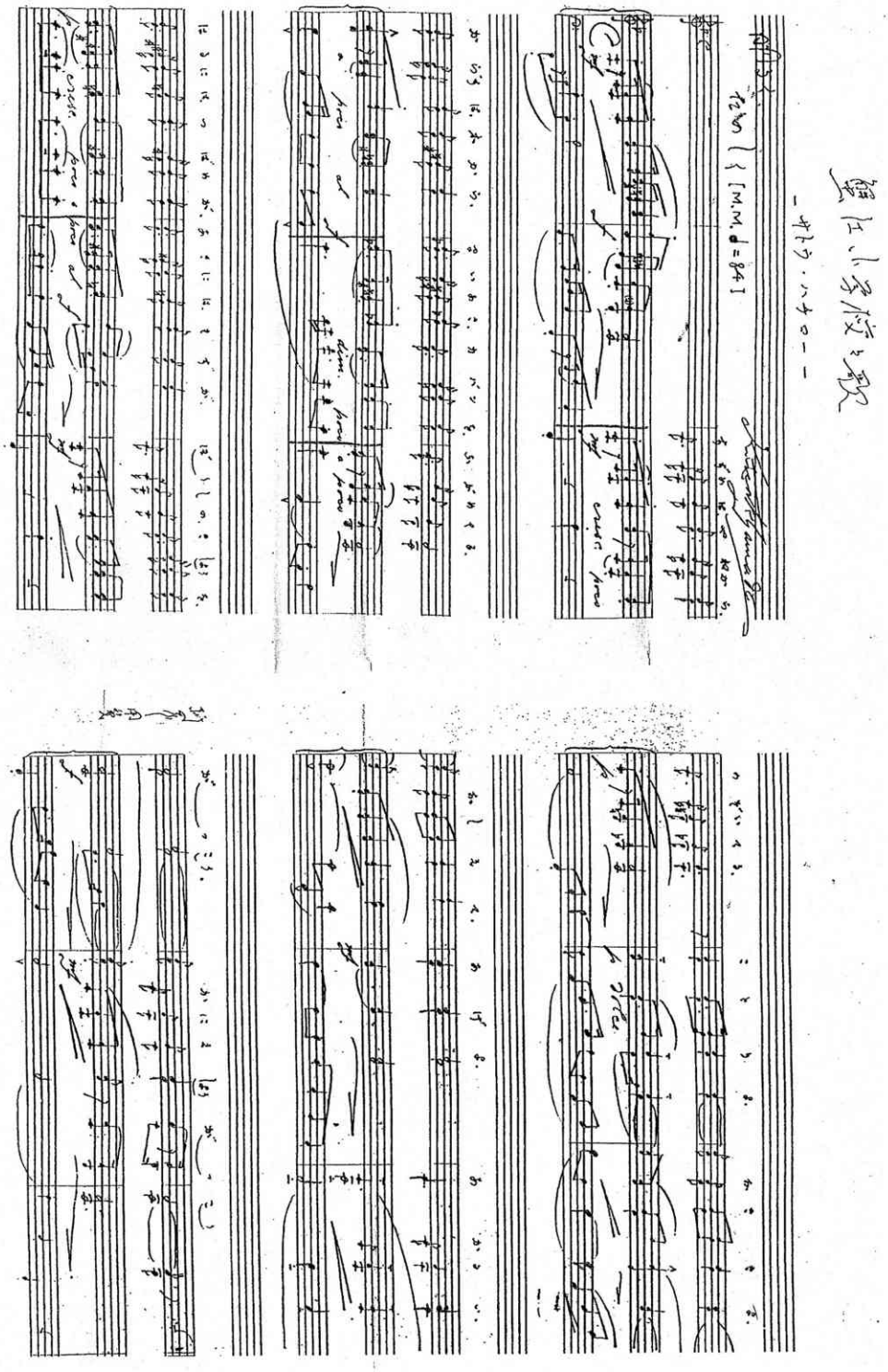
作曲家として有名な山田耕筰氏は十三日午前十時すぎ歌手辻輝子さん同氏夫人と同伴で海部郡蟹江町蟹江小学校へ自動車でひょっこり訪れ、新緑につつまれた校庭に集まった千余人の児童たちから自分の作曲した校歌を歌ってもらったあと、「樹さん、蟹江町は私のにせ父親の出身地で、懐しの故郷です。この町は私の親友だった詩人北原白秋の出身地（九州）とよく似ています。こうした同じような環境に育つ樹さんのうちから白秋先生のような立派な詩人が生まれることを希望します。そして私の手でよい歌を作曲したいものです」とつぎの世代をになう児童たちを励ましまし手供や先生を感激させた。

山田耕筰氏は同町に住む前町教育委員山田貞三さんと親交があり、二十八年十一月には山田さんから蟹江の各小学校に校歌もないと聞き「それでは私がつくりましょう」とサトウ・ハチロー氏に作詩を頼んで、自分が作曲、当時耕筰氏は二次の募集をかねはるばる来校し校歌発表会に臨んだことがあり、五年ぶりの十二日夕刻、関西へ新幹線旅行に出かける途中、最近「いて関所き」をしたばかりの水郷蟹江温泉が完成したことを山田さんから聞いて、休養のため同温泉で一泊、多忙がしい身をさいて、かつて自分の作曲した蟹江小の校歌がどんなに歌われているかを知りたいために小学校を訪れた。

耕筰氏は校庭で元気に歌う校歌を聞きながら「とても上手に歌えるようになった」と何度も首をふりながら満足げにうっとり聞き入っていた。（写真はステッキ姿の耕筰氏に校歌の斉唱を聞く山田耕筰氏＝蟹江小学校服部昌史先生撮影）



**資料３**　蟹江小学校・山田耕筰・直筆楽譜



**資料３．** 直筆の山田耕筰作曲の楽譜。２部合唱になっている。ヘ長調で作曲され、詩も曲もとても温かい平和な小学校の様子が窺える。これらの資料は平成24年６月に蟹江小学校に教育訪問指導時に見せていただいた山田耕筰の資料を、同年７月に山田斉教頭先生のご厚意でお送りいただいたものである。教頭先生は訪問指導の際、校歌を筆者のために歌ってくださり、宝物を見つけたような感動的な一時であった。

当時、同伴していた辻輝子のことを耕筰は次のように書いている。

「良妻は母に似る」と昔からいっている。その意味において辻輝子はまことに良妻である。陽気でいて細心苦難をものともせぬところなど、母そっくりである。再度の結婚生活に失敗した私は、ようやく晩年になって、家庭というものの幸福を満喫している。私を憐れんで亡き母がこうしてくれたものとしか思えない。爆撃下の東京、それも一連隊真裏という、とても危険な旧宅で戦い通し、ようやく終戦となるとパージに脅かされ、続いて半身不随というようなヤッカイな病気にかかり、まったくいっしょになってから半月と平静な日を持ちえぬ彼女なのだが、内政外交のいっさいを一人で切り回していささかのたじろがぬ点など、母の化身としてしか思えない。再起不能をいわれた私の病気も、やつとよくなり、私を熱愛してくれた亡き母も、どこかで細い目をして私どもを見守っていることであろう。（昭和30年12月19日『週刊朝日』）[19]

母の面影は誰にとっても永遠のものとなるのだろう。

## ５．童謡について

歌曲と並んで〈童謡〉のジャンルを無視することは不可能である。「童謡百曲集」とし1926年（大正15年）11月から翌年３月にかけて一挙に噴き出してきたこれら100曲の童謡は、山田芸術の根源を明らかにしているばかりでなく、童謡というもののありかたをも一新し、それは戦後の中田喜直、團伊玖磨、大中恩などの童謡作品にまで影響を与えている。山田自身が童謡について記した一文を抄録すると（「詩と音楽」1922年11月号）「童謡には２つのあらわれがあります。その一つは芸術的童謡で、他の一つは遊戯的童謡とでも呼ぶべきものであります。（中略）童謡が児童の現状に媚びる場合には、児童の瞬間的亢奮状態を、導き出すことは、それは何らの永続性も暗示性も成長の可能性も持ってないものであるが為、次の刹那にはあとかたもなく消えてしまうでしょう。之に反して所謂芸術的童謡は、現在の子供の心に対しては不可解な分子を持っているにしても、子供をその行き着くべき境地に導く自然の道標と教化の力を含有しているものだということができると思います。」

鈴木三重吉の『赤い鳥』運動にも強い共感を示した山田は北原白秋・野口雨情・川路柳紅・三木露風・西条八十の童謡詩集に触発され、詩人によって分けられた各20曲づつ　全５集が昭和２年５月、出版された。誰の耳にもやさしい子供の世界と幼いころへの大人の郷愁が交叉して、なつかしい情感を描き出す。特に興味を惹くのは「からたちの花Ⅱ」である。Ⅱの方は、

Ⅰと違って有節歌曲となり旋律も単純化されている。[20]

## 6．改名物語

この物語は少々余談となるが、耕筰のこの話によって非常に印象深い話となり、山田耕筰を覚えていてくれる可能性があるため付け加えておく。筆者の中学時代、教師が山田耕筰の氏名を覚えさせるために「山田耕筰の筰には、竹冠がついていて、以前、筰は作であったが、耕筰には頭にケがなくなったのでケが２本つけられた」といって漢字を間違えないように指示された。そのあとそう教えられたにもかかわらず、音楽のペーパーテストで教師が「耕にもケをつけた人がいる！あれほど・・」と生徒に注意していたことはかなり前の記憶である。面白い話のようではあるが詳しく調べてみると耕筰自身、切実な思いで考えなければならないところもあり、彼自身は名前の由来をつぎのように説明している。

“驚いたことには、山田耕作という姓名は全国に100名以上もある。東京だけでも十五人はいる。ゴロの上からいっても「山田」というと「耕作」とつけたくなるらしい。私の耕作は満州で終戦直前亡くなった従兄、大塚淳の親父がつけてくれたのだが、あまり香ばしい名とはいえない。少年時代にはヤマ・タゴサクと揶揄され、楽団でも専ら「山耕」などと、魚屋の屋号よろしくの呼び方をされる。それくらいならまだしもなにしろ東京だけでも15名以上にも同姓同名なので、まるで予期しない迷惑をうけ、時には家庭争議までおきるという始末なのだ。”

その後の経緯を掻い摘みながら辿っていくと、改名したいと思っていたが簡単にはできず、そのような時に、いつも耕筰が指揮をしている姿を見ていた東大の颯田琴次からの忠告でカツラを被れと云われた。カツラは嫌なので、丸坊主にし、名前の上にカツラを着せてみようかと考えたそうだ。できるなら発音的には同じで、しかもカツラ代用になる字はないかと康熙辞典を漁りめくった。そして見つけ出したのが、「筰」の字なのだ。「耕筰」としさえすれば日本で唯一人となることだから、同姓同名から起るあらゆるトラブルも妨げ、颯田兄のいうカツラ代用にもなり、心のこりのケも二本得られたと同じ事になるし、全く一石二鳥だという訳で…。ということらしいが、この改名は時も時、第一次漢字制限の実施された翌日、当時の東京日々紙上で発表したが、相当社会問題になった。「漢字制限を一人で阻止しようとする横暴さ」といわれ、２．３年間は断乎としてケ無しの作で手紙をよこした。そのうち戦争が起こり、名前も気にされなくなり、竹冠付の手紙が来るようになり、同姓同名から起きるトラブルもなくなったという。[21]

耕筰は趣味として姓名判断もしていたことは人に知られていたようである。辛いことが多いほど、人はより幸せになるための努力をするのだと感じたが、耕筰は逆境にも強くユニークな性格を持っていた。だからこそ、このような時代に強く前進することが存続したのだ。

## 7. 考察

山田耕筰について詳しく知るために山田耕筰著「自伝　若き日の狂詩曲」を読み始めてから映画「アマデウス」が脳裏に浮かんできた。それほど現代の常識と違った環境であるということが理解できる。例えば、現代の若者が明治村を訪れた際に、現実離れしていて信じられないと思われる光景が目に入ることであろう。映画「アマデウス」についても授業内で鑑賞させたら、このような映画は「モーツアルトのイメージが崩れる」といった学生もいたが、目や耳で確認できるものを美化するのではなく、その時代背景や、環境における人間の行動は、およそ現代では想像もつかないことが起こっていたことは事実である。その背景を理解しながらの芸術の所産を観ていくことで価値も理解できると考える。要するに深読みができるかどうかで価値観が変わっていく。

バッハ（1685年～1750年）は父とやはり10歳くらいで死に別れて長兄のところに引き取られ、音楽を学んだ。この偉大なるバッハもかつては聖歌隊員のひとりから殴りかかられ、棍棒片手に殴り掛かってきた相手にバッハは反射的に剣を抜いていたと云われている。場所はアルンシュタットの市庁舎広場でそこで「チャンバラ騒ぎ」を繰り広げたという。幸い聖歌隊の少年たちが引き留めに入ったのでいたずら程度で終わったが、現在はその場所に厳めしいバッハの銅像ではなく、若々しい青年バッハの両足を延ばして腰かけている銅像があるのを実際に観たことがある。[22)]

また、ワーグナー（1813年～1883年）は９番目の子で父とは生まれて半年後に死別している。父親は警察署の書記であったが、熱狂的な演劇愛好家でフリードリヒ・シラーの崇拝者であった。オペラ歌手、女優などの女兄弟の多い中育った。養父も舞台俳優であるので、この環境から見ても、あのワーグナーの壮大な楽劇が生まれたとしても決して不思議はないと考えられるのである。[23)]

このワーグナーの影響を色濃く受けて耕筰が作曲したのが楽劇『堕ちたる天女』（1913年留学中作曲）である。そしてこの『堕ちたる天女』を作曲するにも留学中のエピソードがあり、日本では四家文子が出演している。

従って、今回、耕筰の背景を辿ることによって明らかになったことが２つある。１つめはドイツ音楽が山田耕筰によって、作曲形式が日本音楽に反映され、基礎となったことである。政治的または宗教的支配などの時代の流れによって、現在、我々が理解できないほどの当時の支配者が勝手に決めた常識といわれるものに振り回され、それと向き合って必死に生きてきた耕筰の人生すべてが日本音楽という形になって人々に愛され、伝えられてきた。耕筰のどのような環境にもネガティブな考えではなく対応できるエネルギーを「生きる力」というのだろう。

２つ目に明らかになったことは、筆者の恩師四家文子が「美しい日本語と香り高い歌を」と

いうことを掲げて《波の会》を立ち上げたこともこの山田耕筰に直接指導を受けたからであり、その日本歌曲の研究が現在も受け継がれているということである。耕筰は「詩の中にも、自ら作曲され得る詩と、作曲され得ない詩とがある。これは極めて當然のことであって詩の韻律がそのまま渾然として外面に流れ出るものと、韻律そのものが内にこもるものと二つがある。前者は歌唱し得る詩、即ち作曲し得ざる詩ということになる。」[24] とか「然らば詩―言葉の上のアクセントと音楽上のアクセントとの関係は如何というに、これまた多くの人々によって全く同一と主張されているが、私は尠くも日本語の場合に於いては全然別であると信ずる。」[25] という日本歌曲への耕筰の論考がある。

そして、また四家文子の演奏会プログラム（昭和33年10月７日）に山田耕筰が書いた文章は次のようである。

「また大変な御精進でとても嬉しく思っています。日本歌曲の連続演奏、と伺うだけでも何か力強く感じられます。どこの国でも悩んだその国の音楽を上げてゆく時にぶつかる悩みなのです。そして今思い出すのは、シャリアピンの言葉です。彼がはじめて来た時です。大阪朝日新聞の社長から、切角、世界的大家が来られたのだから日本国有の民謡を演奏してほしいと頼んでくれとの事でした。私はそれは無駄だと思ったのですが、やむなく伝えました。するとシャリアピンがいうのに「私はロシアに生まれた芸術家です。私の血の中にも肉の中にも、いや骨の中にもといえるでしょう。私の中には貴い祖国の言葉が流れあふれているのです。それこそは私にとって生命にも等しいものです。従って私は今日迄、自分の国の言葉を美しく歌うために、懸命の努力をしてきたのです。その私の一生かかって研いた芸を買ってはいただけないでしょうか。

芸術家の使命は大衆に奉仕することです。それも無目的でなく真実を語ることによって、従って俄か仕込みの日本語の歌で自己を語ることは、自己を偽り、大衆を偽ることになります。然し、どうしても私にそれを望まれるのなら、私は演奏をせずに、このまま失礼するばかりです。大衆をだますことは、私にはできませんから・・・」というのです。その意味で、あなたが、敢然、日本歌曲の成長に対して示される行動は、我々作曲家にとっても、そしてまた、この国の音楽の発達の上からも、重大な意義を持つと云わなければなりません。心から感謝します。」[26]

実際に現在では演奏会にて日本の代表的な唱歌などが演奏されることが多くなってきた。外国人による日本語の歌は、どれだけ上手であると思われる日本語で歌っても、少しづつ、発音の違いがよくわかる。実際に、以前にホームステイでイギリス・イートン校の２人の高校生が来たが、「赤とんぼ」の「と」がいいにくいらしく「Tuo」と発音していた。何回も発音をお互い交わして努力はしていたが、何か変だった。発音で音楽そのものが決まるということではないが、その国での発音は生まれつきのそれぞれ独特なものがあるということが言いたい。日

本人の前だからこそ、日本語で歌うことは意味が伝わり、まだそれが許されることがある。しかし、日本語の歌が口から口へと伝言ゲームのように外国に伝えられたら、全然違う発音で違う言葉で伝わることも考えられる。また反対にイタリア語、ドイツ語、フランス語で日本人が歌った時も同じ現象が起きているだろう。それだけに自国語というのは大切なものであり、常に美しく正確に伝え、話されなければならないと考える。言葉と音楽を一致させることは難しい。まして楽器で西洋風にアレンジが始まると技術的には素晴らしいとは思うが、日本人特有のリズム・メロディー・ハーモニーが感じられなくなってしまうのである。

耕筰の弟子である團伊玖磨はこう書いている。

「先生は作品について細かい注意はありませんでしたが、いつも言われたことは「歌曲を書く場合には日本語を大切にしなければいけない。日本語をじっと聞いて、その日本語の中に内在する音楽性を抽出して定着しなければならない。それが日本の歌曲を作るまず第一の方法であるし、歌曲ばかりでなくて器楽曲を書く場合でも、やはり自分の母国語の中のリズムは大切にしなければならないのだ。それが１つの音楽的な―ことばでない意味の音楽―テーマ、リズム、その他の大切な柱となるのだ」ということだけはきつく言われました。」[27]

## ８．おわりに

山田耕筰は誰もが親しむ童謡から歌曲・楽劇・交響曲など、幅広い音楽をドイツ留学によって、その技術を学び、習得し、日本芸術音楽を確立することに成功したといえる。人々が親しみやすい歌「赤とんぼ」でさえ、作詞者の意図、そして作曲者の形式は深い意味を持つ背景であった。

まして「からたちの花」は３回もその形を変えて作曲されている。このような経緯で確立された日本歌曲の名曲の数々を、時代とその背景を共に忘れ去られることなく、広く深く受け継いでいかなければならないと考えると同時に、この大切な日本の遺産を守り、伝えていきたい。

### 注

１）愛知県蟹江町立蟹江小学校平成24年度蟹江小学校要覧

２）山田耕筰著「自伝　若き日の狂詩曲」東出版　1999年12月25日　第1刷　P303－309

３）前掲2　P13－14

４）前掲2　P39－41

５）前掲2　P46－47

６）前掲2　P49

７）前掲2　P52

８）前掲2　P67
９）前掲2　P22,23
10）畑中良輔著「日本歌曲全集解説書　日本歌曲について」音楽之友社　1991年6月30日P36
11）前掲2　P37
12）藤原薫著「愛の歌　音楽のしるべ」創教出版　1994年5月20日P92、94
13）前掲10　P39
14）後藤暢子・團伊玖磨・遠山一行編著　山田耕筰全集１岩波書店2001年4月20日P352，353
15）前掲10　P38
16）星野辰之著　「歌碑を訪ねて 日本のうた 唱歌ものがたり」新風舎2004年1月18日
P231－233
17）前掲16　P228、229
18）前掲10　P39
19）後藤暢子・團伊玖磨・遠山一行編著　山田耕筰全集３　岩波書店2001年10月19日P684
20）前掲10　P40
21）前掲19　P567－569
22）加藤浩子著　バッハへの旅　東京書籍2000年6月2日　P70，71
23）吉田真著　ワーグナー　音楽の友社　2006年1月31日　P7－9
24）前掲14 P242
25）前掲14 P245
26）四家文子著　日本歌曲のすべて　創彩社　昭和37年1月20日　P156
27）前掲2　P300

資料提供について
蟹江小学校校歌についての「山田耕筰」資料の掲載は許可を頂いています。